

「どの子も育つ、育て方ひとつ」

—スズキ・メソードという独創—

●国際教養大学学長 中嶋嶺雄

(なかじま・みねお)

私が、スズキ・メソードとして世界に知られる鈴木鎮一先生の「松本音楽院」第一期生となったのは、終戦の翌年、小学四年生のときであった。鈴木先生のヴァイオリンの教えは、単に音楽を教えるというものではなかった。それが今の私を支えている。

先生は「全国幼児教育同志会」という幼児教育における音楽の重要性を研究する会も設立された。この会は「才能教育研究会」と改称され、現在、私が三代目の会長を務めさせていただいているが、鈴木先生が生涯にわたって探究された音楽を通じての人間形成や情操教育の手法は、「スズキ・メソード」として全世界で活用されている。

鈴木先生は一九九八年一月に九十九歳で亡くなるまで、国内外に多くの名バイオリニストを育てられた。日本人でも、江藤俊哉、豊田耕児、小林武史・健次兄弟、といった名前は世界の音楽界で知られている。音楽の前に人間性を重視された先生の門下生たちは、いずれも「上手な演奏家」とは一線を画す存在として知られている。皇室の中にもスズキ・メソードでヴァイオリンやチェロを学ばれた方がおられる。ウィーンでも、ベルリンでも、またシドニーのオペラハウスでも「スズキ」の演奏会が行われており、二〇一三年には松本市で世界大会が開かれる予定だ。アメリカではスズキ・メソードで学んでいる子供たちは二十

三十万人と言われ、日本よりも高い認知度を得ている。ニューヨークのハーレムにある小学校では、荒廃した校風を改善するためスズキ・メソードを活用し、その実話が「ミュージック・オブ・ザ・ハート」という映画にもなった。アメリカの大学ではスズキ・メソードの研究やそれを活用した授業が行われているところも多いが、日本ではスズキ・メソードを活用している人は数万人といったところだろうか。日本の大学でカリキュラムに取り入れているのは国際教養大学しかない。「スズキ・メソードアンサンブル」の授業では、初めてヴァイオリンに触れる留学生たちも非常に熱心に取り組み、学ぶことの基本を体感している。

スズキ・メソードが世界で評価される理由は、子供にも分かる具体的な手法が教育的成果として表れていることにある。それは、スズキ・メソードが、二つのことを重視しているからだ。一つは、耳から聞いて暗譜すること。もう一つは、反復練習である。暗譜と反復の効果は、体に染み付くことにある。私自身も、小学生のときに覚えた曲は、六十年以上経った今でも楽譜なしで演奏できる。

同じことが、私が主張し続けている英語教育にも当てはまる。日本の英語の授業は文法から入る。受験勉強用の文法重視によって一般に日本人は英語を話すことができない。英語も、暗唱と反

復を行うことによって、議論にも参加できるほどの力が身に付いていく。そして、日本語以外にも外国語が使えるようになること、思考や知的世界が広がっていく。

日本の官学アカデミズムは、鈴木先生がノーベル平和賞の候補に挙げられた事実を知らないばかりか、人格形成が、家庭教育であり幼児教育によるところが大きいことにも十分に気付いていなかった。安倍内閣のときの教育基本法の改正によって初めて幼児教育に関する条文が入ることになったくらい、日本の教育行政の認識は遅れている。

日本で生まれて世界に広がっていったスズキ・メソード。西洋の音楽に日本人の繊細な感性や指先の器用な技術が加味されて、世界が共有できる幼児教育の方法となって世界に発信された。これは、今日のグローバルな時代においてますます広がっていくこととは、ある意味で日本の独創性を広げていくことになる。

その独創性を生み出すのは「型」である。古来、日本は「型」を身につけることで人格あるいは品格を養ってきた。そう言うのと、人間を一律に扱う集団主義であると批判する向きもあるが、私の教育者としての経験と私自身の人生を振り返って断言できるのは、人間はある一定のところまでは何事も繰り返し行うことで「型」をつくらない限り、自由に発想することができないという

こと。ピカソやマチスも基本のデッサンを繰り返し、「型」を身に付けたことで抽象的な芸術性の高い作品を創造し得たのだ。「型」を無視した子供の自由画とは根本的に違う。

一方、平等主義という誤った教育観は結果的には個性を育てない。能力に応じた教育こそ、一人ひとりの個性を育むものだ。個性は「型」を受け継ぐ教育から生まれる。

「ヴァイオリンは、一日弾かないと二日後退する」と鈴木先生はおっしゃっていた。毎日少しずつ、同じことを繰り返すことが、音楽をしっかりと身に付け、音の質を向上させることになることを、長年続けていくうちに私も実感できるようになった。音には人間味が表れるのだ。鈴木先生が「どの子も育つ、育て方ひとつ」という確信を得られたのも、そういう理由からであろう。

才能教育研究会の発表会の最後には、幼児が最初に習う曲の「さらさら星」を全員で演奏する。鈴木先生は、この変奏曲の八つのパターンの譜面を作られた。メロディーは同じなのだが、それぞれのリズムが違う。この曲を通してリズム感と緊張感が醸成されていく。日々の生活のリズム感や緊張感をほかのやり方で培うことは困難だが、この演奏方法ならばそれができる。スズキ・メソードが世界に広がっていったユニークさの原点は、ここにあるのではないかと思っている。



中嶋嶺雄 (なかじま・みねお)
国際教養大学学長。同大学理事長。国際社会学者。一九三六年(昭和十一年)松本市生まれ。東京大学社会学博士。東京外国語大学学長。国立大学協会副会長。アジア太平洋大学交流機構(UMAP)初代国際事務総長。文部科学省中央教育審議会委員、内閣府教育再生会議有識者委員などを歴任。その間、オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院などで教鞭を執る。二〇〇四年(平成十六年)国際教養大学開学に伴い理事長・学長となる。著書は『全球(グローバル)教育』(西村書店)、『音楽は生きる力』(同)、『国際関係論』(中公新書)、『北京烈烈(上・下)』(筑摩書房・サントリイ学芸賞受賞)など多数。第十九回「正論大賞」受賞。